

## 丹羽邦男教授を悼む

清水 嘉 治

このたび丹羽教授の突然のご逝去の報をうけ、驚きと共に哀惜の念に耐えられません。どうして、こんなに早く逝かれたのか、の問いが心の底から連続して起ってきます。

わたくしが、教授の直接訃報に接したのは平成六年八月十六日午後三時、海道勝稔教授からの電話でした。それは、八ヶ岳山麓の山小屋で仕事をしていたときでした。海道教授の話では、同年八月十六日午前十時二十分、藤沢市の自宅で亡くなられたというのです。わたくしは、何度も、本当ですかと聞き直し、信じられないといいました。そのあと、学部長として、事務当局、関係者に連絡をしました。暫く、半ば無気力状態になり、丹羽教授への深い哀惜の氣持にかられました。

わたくしは、横浜に帰り、さらに丹羽教授と親しい研究者に連絡をとりました。皆さん、驚きの声でした。

わたくしは、平成六年七月末日、藤沢の自宅に病氣お見舞に行き、いろいろと懇談したく電話しましたところ、逆に「ご心配なくお仕事に専念して下さい」といわれましたので、安心して八ヶ岳の方に行きました。

また丹羽教授からの同年三月十一日付、わたくし宛のお手紙でも「私の方は、かなり徹底したビタミン療法をはじめめており、このところ少しずつ体調は好転しているように思います。人から顔色等も随分よくなったといわれ、回復

しています」と書いていました。

七月末の元気なご返事、三月のお手紙の回復具合を察しますと、安心した対応をせざるをえませんでした。

教授が元気で教壇に立っていた頃、丹羽教授と偶然、一緒に帰宅することがときどきありました。横浜駅から大船までの間、福島正夫先生のこと、アカデミックな学風創造のこと、大学院のあり方などについて、熱心に話しておられました。こちらからは、新しい地域主義と歴史学、経済学のあり方について自由に問題を提起しました。こんな雑談をしながら大船で別れたものでした。いまでも、再び一緒になったら「日本の農地改革と近代化」のことで議論していたかと思いませんと残念ではありません。

改めて聞きたいのです。なぜこんなに早く逝かれたのでしょうか。それこそ哀絶の心が込み上げてきます。

丹羽教授は、一九二八年（昭和三年）二月東京都杉並区阿佐ヶ谷で生まれ、旧制府立二中、武蔵高等学校を経て、一九五三年三月東京大学農学部を卒業し、同大学・大学院で農業経済史を専攻しました。とくに古島敏雄、福島正夫の両先生のもとで「寄生地主制」を共通テーマとした日本の近代農業史に重点をおいて研究したようであります。

一九五七年四月岐阜大学に赴任し、農業史、農村社会学を担当しました。一九六三年同大学の助教授となり、農業史を講義しました。

丹羽教授は、一九六二年に、処女作『明治維新の土地変革』（御茶の水書房）を公刊しました。それは明治維新における土地領有制の解体過程を実証的に論述したものであります。さらに二年後、地租改正前後期の土地所有の実態を克明に分析した『形成期の明治地主制』（塙書房）を公刊しました。

こうした研究業績を踏まえて、一九六六年十月、神奈川大学経済学部教授として赴任し、経済政策、経済史の講義とゼミナールⅠⅡを担当し、学生の指導に専念しました。

この当時、一方で岐阜県史、明治初年地租改正基礎資料の実証研究を重厚におさめながら、学生のゼミ指導にも原資料を丹念に読みこなす方式を取りました。丹羽教授は一貫して冷静な頭脳と温かい心を両立させた指導方針をもっていましたし、学生から尊敬される教師でもありました。丹羽教授のゼミ出身のある卒業生は、「先生の指導で、古文書を読めるようになりました。先生の粘り強い指導方針にはいつもやられました」とっていました。

だが、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて日本の大学は、学生の異議申立て運動が起り、この神奈川大学も、「大学改革」「大学紛争」に直面しました。丹羽教授も、その嵐の中に立たされました。一九六九年九月に経済学部長に、同時に学長代行を兼任し、大学のシュトルム・ウント・ドラングの中で、学生と団交を通じた大学改革の行政に全力を傾注せざるをえなくなりました。大学の自治を構築することがいかに苦悩にみちたものであるかを実践のなかで体験したのです。この時期にも研究心を失わず、神奈川県通史を着実にまとめていたのです。驚くべき開拓心を秘めて、大学紛争に対応したようです。

一九七九年、再度、経済学部長に選出され、カリキュラム改革や研究条件の整備に没頭したようです。さらに一九八三年七月から八七年九月まで、常務理事を務め、平塚キャンパス作り、また外国学部中国学科作りにも力を入れたようでした。

この時期、丹羽教授は、神奈川大学学風創造運動を多面的に考えていたようです。とくに平塚キャンパス作りの前に、六角橋キャンパスの充実、とくに当時永井理事長のもとで常務理事を務めつつ、学識豊富な研究者で、かつ大学行政の経験ある東京の有名な大学の元学長を神奈川大学の学長候補者として推薦し、その運動を静かに展開していたのです。神奈川大学の学風と品格を高めるために、一方で質実な研究上の開拓心に溢れたアカデミックな大学の性格をもち、他方で、自由で創造性に富んだ大学作りを志向していました。このことを丹羽教授からもちかけられたわ

たくしは、いろいろと考えさせられました。そのための例の候補者への交渉に行く羽目になりました。もちろん、大  
学論については、四・五時間程議論しました。

丹羽教授と永井理事長は、最終的には、粘り強く多面的に例の候補者に当たったのですが、相手側の周囲の事情で駄  
目になりました。いま考えますと、丹羽教授の大学作りの情念と探求心には頭が下がりました。

その後大学の動きは平塚キャンパス作りと六角橋キャンパスの再編へと動きました。丹羽教授は、一九九三年（平成  
五年）神奈川県大学院歴史民俗資料学研究所委員長としてその大学院設立に貢献したのであります。経済学部の経  
済史部門の充実だけにとどまらず、歴史民俗学の分野の充実のためかなりの精力を傾けたようです。恐らく、この  
ご努力は、丹羽教授の健康にも知らず知らずに過剰な負担をかけたことになったのではないかと思えてなりません。

今日の歴史民俗学研究所は、丹羽教授と山口徹教授を両軸に形成されたのであります。  
こうした大学行政の仕事を続けながらも、丹羽教授は一貫して研究者としての鬼でもありません。一九八九年には、  
『土地問題の起源——村と自然と明治維新——』（平凡社）を公刊し、近代的土地所有権が土地利用におよぼした破壊的  
インパクトを歴史的・実証的に分析したのであります。その他共著も多数にのぼっており、その業績に圧倒されます。

最後になりましたが、丹羽教授は、病魔と闘いながら、『地租改正法の起源——開明官僚の形成』（九五年三月、ミネ  
ルヴァ書房、逝去後六か月後公刊）に没頭していたのです。同僚の教授と、どうしてこんなに無理するのでしょうか、と  
心配しました。わたくしは、「のんびり休んで、雑学に耽ってほしい」といったのでありますが、死の直前まで、  
この労作の校正に力を入れたというのです。当時、このことを校正などの完成にお手伝いをした本学広報課の澤木武  
美課長から聞き、当時丹羽先生の性格なのでしょうかと、ひとり健康を祈るだけでした。

この労作の「はしがき」にありますように、丹羽教授の研究史のプロセスの一端がわかります。わたくしなりに整

理させて頂きますと、従来の地租改正研究を地租改正だけに狭くこだわってきたことへの反省であります。明治政府が地租改正法、賤民廃止令を公布するに際して、両法の作成過程が密接に関連し、その作成主体も同一であることを実証的に明かにしたのであります。教授の地租改正研究は一步前進し、寄生地主制——土地所有の研究との関連性をより強固に位置づけました。

こうして遺稿となった労作は、専門家の間で評価され、さらに重厚な業績として輝くことでしょう。

以上、丹羽教授の全仕事は、専門分野における独自の業績の貢献と後進の指導、大学行政の三つの分野を結びつけてきたことにあります。学ばされることばかりです。

いま教授をお送りするにあたり、先生の在りし日をお偲び申し上げ、弔辞といたします。

丹羽教授、どうか安らかにお眠り下さい。

一九九四年八月十八日、

藤沢市斉場の告別式での弔辞。

なお、若干の補足をしましたことを記しておきます」

## 丹羽邦男教授を悼む

経済学部長 渡辺精一

丹羽邦男教授は、平成六年八月一六日、六六歳にして病に冒され、現職のまま、ご逝去されました。経済学部にとって、それはまさかの痛恨事でした。ここに改めて、そのご逝去を悼み、心からのご冥福をお祈り申しあげます。

丹羽教授は、東京大学農学部を卒業されたあと、同大学大学院で農業経済学を学ばれました。同大学農学部助手、岐阜大学農学部講師・助教授を経て、昭和四一年一〇月、本学経済学部にて赴任されました。爾来三〇年近くの間、経済学部長のほか、大学院経済学研究科委員長、短期大学部主事、学長代行などの要職を歴任され、また法人常務理事もお勤めになりました。最近では、日本常民文化研究所の本学への招致、および同研究所をベースとした大学院歴史民俗資料学研究科の新設にそれぞれ尽力され、平成五年には同研究科の初代委員長に就任されました。本学にとって、丹羽教授は、まことにかけがえのない存在でした。その訃報を、運命の仕業というには、余りに冷たい仕業と申さなければなりません。

研究業績もまた、極めて豊かでした。ご専門は日本近代の経済史でしたが、わけても土地所有制に深い関心を寄せられていました。昭和三七年に上梓された『明治維新の土地改革』は土地領有制の解体過程を包括的に論述されたものですが、それは、その前年に授与された農学博士（東京大学）の学位論文の結晶でありました。それにすぐ続く、昭

和三九年の『形成期の明治地主制』で、地租改正前後期の土地所有の実態が解明されました。また、近年になってからは、平成元年に『土地所有の起源——村と自然と明治維新』が出版され、そこでは近代的土地所有権が土地利用に及ぼした破壊的影響を歴史的・実証的に明らかにされています。そして、病魔と苦闘されながら完成した『地租改正法の起源』がこの世に出たのは、ご逝去のあと、平成七年一月になってからでした。この著書は、地租改正法を素材に、明治政府の権力集中、統一国家形成の過程を究明した意欲作である、と申せましょう。明治期における土地所有制に関し、丹羽教授は、かけがえのない研究者であったのです。

学生を引率し、こまめに、全国各地に足を向けられました。各地の県史や市史の編集・執筆にも、多くの労を注がれました。そうした仕事をされる過程で、また、そのあい間を縫って、同教授に憩いの場と時とを提供するのが、いつも決まってご愛用のパイプでした。定年退職されたら、『パイプとともに』とでもいった題で、肩のこらない随筆でもお書きになればよかったのにと、思う心があとに残ります。

しかし、結局は良い人生をお送りになったと思いたい、と私は申しあげることになります。そしていまはただ、どうかごゆっくりとお休みください、とつけ加えさせていただきます。

丹羽先生、どうぞ安らかに。